集

俳句フォーラム

2016年10月 第61号

白山句会

夏の雲　浦川哲子

永六輔逝く見上ぐれば夏の雲
ふるさとは外つ国闇の月見草
半夏雨バッグの中の万華鏡
文楽の姫よよと泣く凌霄花
よきことはちょっとでよろし滝めぐる

新樹光　都築繁子

障害物とべる一瞬風光る
新樹光役行者の倚像美し
青梅雨や両岸にみる相撲絵図
橋に会い橋振り返る夏の雲
潮の香と錆びし錨や夏木立

舟遊び　田中藤穂

舟遊び隅田川波目の高さ
舷へ寄りては離る川鵜二羽
大錨大鎖錆び夏草に
草いきれ海に向け置く大錨
句仲間の健脚揃う夏帽子

梅雨の蝶　平野無石

薫風や馬事公苑のゆで玉子
梅若葉不動の胸に水かけて
紫陽花や伊豆磯石の水匂う
杖一歩緑潤ぅ馬場の土
梅雨の蝶路傍にひそと庚申塔

金の耳　植木やす子

バーを跳ぶ練習馬にも花吹雪
若葉風五百羅漢は金の耳
青嵐御手洗かこむ人文字草
水かけて願う地蔵や木下闇
色づきし梅の実一つ石の庭

花ざくろ

工藤はる子

馬労ふまなざしやさし花の影
狛犬にいとしごのあり新樹光
胸の火は赤く小さし花ざくろ
風に乗る椋鳥の群夏空に
夏の園巨木俗世を隔てたり

夏

篠田純子

風光る水無き馬の水呑み場
ヘラクレスのような羅漢や堂薄暑
橋の裏は幾何学模様舟遊び
澪標の赤青きいろ夏の潮
対岸はなまこ塀なり夏かもめ

後の世は

大山夏子

重馬場の馬蹄のも花の塵
花曇人馬一体バー越える
後の世は羅漢なるかも竹の秋
菖蒲田に佇ちて至福の風紫紺
蜻蛉生る忙中閑の金曜日

下町風俗資料館と不忍池

植木やす子

台東区立下町風俗資料館は、上野公園の不忍池に面した入り口近くに一九八〇年に開館しました。
当日はお昼前まで冬の嵐で、集合時間も何度か変更になり気のもめる日でしたが、吟行する頃には静まり何時もより遅いスタートでした。

　荒天の納めの句会晴れてきし　　藤穂

館に入るとまず六角形の赤い電話ボックスがあり扉には「自動電話」の文字。現在はあまり見かけなくなって時代の変化をまず感じます。その頃は電話交換手がいて、中し込むと一通話十五銭（当時は銭の位がありました）ちなみに一通話は五分でした。
十銭玉を入れるとボーン、五銭玉を入れるとチーンお金が落ちた音を確認して繋いでくれたそうです。そのほか箱車・人力車・米俵を積んだ荷車等が並んでいます。大店には帳場格子に火鉢・金庫らしき物と招き猫も飾ってあります。

　長火鉢帳場格子の招き猫　　無石

井戸端には盥に洗濯板、布を張った張り板、当時は紙おむつなど想像もつかなかった事でしょう。また銭湯も昔懐かしく再現され、番台があり、床には大きな時計枠や脱衣篭がありました。長屋の土間には、やかん・鍋・湯沸かし器の銅壺など、数多くの道具がありました。横手の駄菓子屋には、数々の菓子・紙風船・折り紙が所狭しと並んでいます。

　駄菓子屋のグリコのおまけ暮れ近し　　繁子

二階には、時間が許せば誰でも遊べるコーナーがあり、ベーゴマ・メンコ・けん玉がおいてありました。

　資料館昭和の暮らし冬うらら　　やす子

お昼もかなり過ぎお腹もすいたので、向かい側のうなぎ屋に行く事になりました。今年のしめくくりで今日は食事を少し格を上げて「伊豆栄」にし、句会は喫茶店ルノアールで行いました。

　伊豆栄に俳句仲間と年惜しむ　　藤穂
　枯蓮を眼下に鰻重うなぎ丼　　やす子
　落葉吹かるる天地の間鳥も我も　　夏子

白山句会の近況

大山夏子

白山句会は吟行句会です。この八月で一九一回になりました。百回まではほとんど吟行句会でしたが、その後は時折、雑詠持寄りの句会が混ざるようになってきました。吟行というのは例え同じ場所であっても春夏秋冬、季節によって出会う景は違うし、同行する人によっても出会いが変ってくるのが不思議です。

思いもかけぬことに出会うのも吟行ならではのこと。新築の歌舞伎座を訪れた時、花道の真上にあたる覗き窓から一分間、舞台を見せて貰えました。真っ暗がりの狭い階段に四人ずつ、あつという間の覗き見でしたが、六方を踏みながら花道を引き揚げる役者を真上から見るという初体験を味わいました。

都心の公園の中に古墳があったり、遊園地で観覧車に乗ったり、いろいろ楽しい経験もして来ましたが、忘れられないのが3・11の大地震。たまたま上野動物園への吟行で、句会場に予約した不忍池の傍の喫茶店へ入った所でした。ぐらぐらっと揺れが来て、喫茶店の入っているビルからも、近所のビルからも次々に人が飛び出して来ました。店の窓から見える道路が波だつて、車は止まり、店の中はテーブルのコップの水が溢れ、店内のテレビで大変なことが起こっているのを知りました。

電車もバスも止まっていて、ケータイも通じません。「外へ出るのは危険だからしばらくここにいなさい。」と店の御主人に言われ、何もしないでいるとかえって怖さが増すばかりなので句会をはじめました。清記、選句、合評まで一時間半ほどたっても、少しも外の様子は変りません。店に迷惑をかけてもいけないと、夫々歩いて帰ることにしました。バスもタクシーも動き出してはいるものの、幹線道路は歩く速度より遅い車でいっぱい。歩道は歩く人で溢れ、無力を感じました。当日の仲間はみな都内なのですが、一番遠い人は真夜中寸前にやっと帰宅できたという、忘れられない出来事でした

また、一年の間に相次いで三人の仲間を失うという悲しい経験もしました。一番若い仲間の急逝で一気に高齢者グループになってしまいました。

歩くのが好きな方、若い方、大歓迎です。ご一緒に歩いて俳句を作りましょう。